



グランシップマガジン
[ジー] vol.24

GRANSHIP magazine
AUTUMN 2004

SPECIAL - 1

世界お茶まつり2004

+ 新才能「利休」+ 今を生きる二人の家元展

O-CHAの新世界へ!

次代を創る顔

女優 原田 夏希

しずおかアーティスト・リレー

画家 寒水 崇之

SPECIAL - 2

写真家、

アンリ・カルティエ=ブレッソン。

SERIES わが羅針 第24回

長谷川 櫂

村松友視の文化漫遊 ⑩



世界お茶まつり
2004

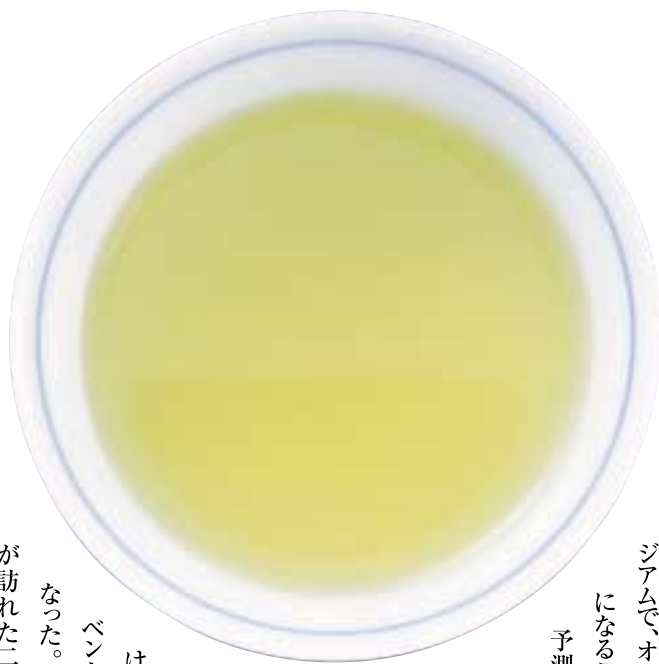
新才能
「利休」

今を生きる
二人の家元展

O-CHAの 新世界へ。

秋になると、白い花を咲かせる「お茶の木」。
学名カメリア・シネンシス、ツバキ科ツバキ属の永年常緑樹である。
このたった一つの種が、
世界中にどれほどの幸せとやすらぎを広げてきたのか。
おそらくそれはこの秋のグランシップがおしえてくれるに違いない。
古くは、メザシグサなどと呼ばれていたという「お茶」。
文字通り、お茶の新世界に目覚める、そんな秋になりそうだ。

緑茶新時代といわれる今、 あのビッグイベントが再び！



八百年前、栄西禪師がお茶の種子を宋の国から持ち帰ったとき、やがてそれが日本の生活文化の二つの根つこになるうとは、禪師自身、夢にも思わなかったに違いない。茶の湯なるものが大成され、日本独特ともいふべき精神、美意識が打ち出されようとは知る由もなし。まして今日のようにペットボトルに入ったそれが、路上で、スタジアムで、オフィスで気軽に飲めるようになることなど、十数年前ですら予測できなかったことだ。

しかもここへ来て、空前の健康ブームである。お茶の効能については、日本はもとより、海外での注目度も高く、アメリカや東南アジアでの消費も伸びていると聞く。

そんな熱い追い風を受けて、この秋、あのビッグイベントが再び開かれることとなった。国内外から十二万もの人が訪れた二〇〇二年の『世界お茶まつり』。あれから三年という月日を経て、またOCHAウェイブが巻き起こる予感だ。

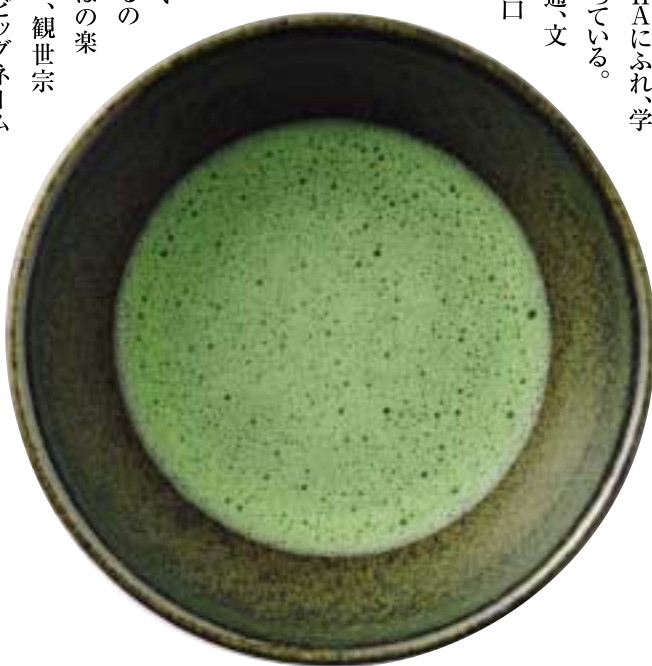
「たった三年の間にもお茶を取り巻く環境は、確実に変わってきています」と語るのは、静岡県農業水産部お茶室の池谷廣専門監。「お茶に関心を寄せる層がますます広がり

つつあります。そうしたことから、今年には高校生を対象にした『しずおかOCHAクイズ』や小学生向けのワークシヨップなども盛り込んでいます」もちろん世界のお茶、静岡のお茶と出会えるコーナーや世界のお茶の見本市をはじめ、国内外から五百人の研究者が集う『国際OCHA学術会議』や『世界緑茶会議』など、前回同様、さまざまな角度からOCHAにふれ、学び、楽しめる仕掛けとなっている。

「お茶には、生産、流通、文化……とさまざまな切り口があります。一堂にこれだけの顔ぶれ、これだけの内容が揃って行うものとしては、世界最大。まさに世界ナンバーワンのお茶のイベントといえるでしょう」

実際に各コーナーでいろいろなお茶が味わえるのも、お茶まつりならではの楽しみ。また、今回は、観世宗家、裏千家という二つのビッグネームの協力を得て、茶の湯の開祖「利休」にスポットをあてたプログラムも加わり、「世界のお茶」とともに、深遠なる「お茶の世界」を覗き見るチャンスでもある。

折しも『大道芸ワールドカップ』で賑わう秋の日。「OCHAする」感覚でぜひ。



静岡県農業水産部お茶室
専門監 池谷 廣氏

「仕事でお茶に関わる人も、生活や趣味で楽しむ人も、自分の好きな角度から、この『世界お茶まつり』を満喫していただきたいと思いますね」

大ホール

テーマ館

「O-CHAは世界語」

11/3~7

世界の「O-CHA」とその楽しみ方に会える文化テーマ館。
お茶の歴史と今、未来をフィーチャー。

●世界の喫茶パビリオン

世界各地の「O-CHA」文化を、展示、体験イベントで紹介。

■日本茶の世界

日本各地に残る振り茶など、珍しいお茶を体験。

■中国茶の世界

多種多様なお茶を味わいつつ、本場中国の茶芸も披露。

■紅茶の世界

インド、スリランカ、インドネシア、ケニアのお茶文化を紹介。

■ヨーロッパのお茶

アフタヌーンティーなど、お茶習慣の今を再現。

■イスラムのお茶

ミントティー、チャイなど、エキゾチックに体験。

■アジア民族の珍しいお茶

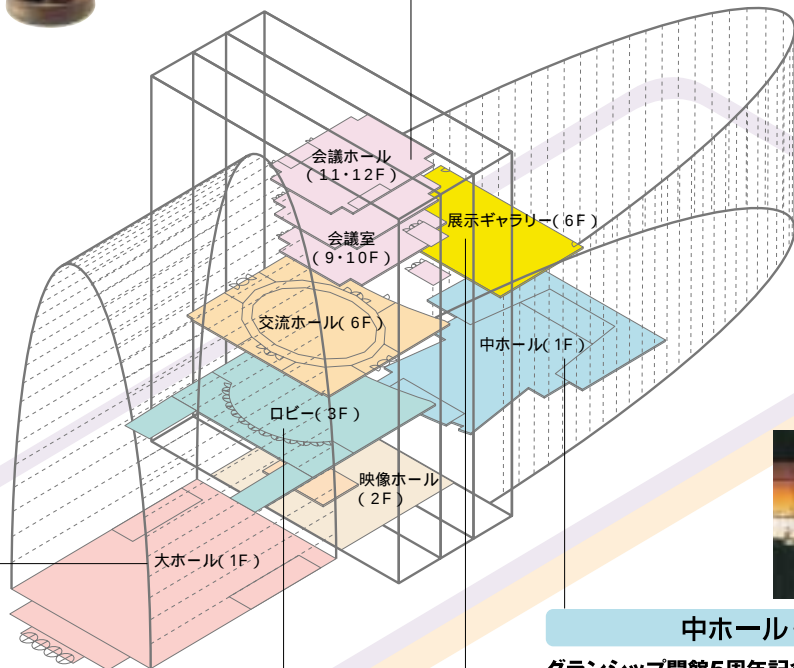
ネパール、ベトナム、ミャンマーの珍しいお茶の旅を。

●ロボットカフェ

ロボットがお茶を淹れ、
運ぶ、未来の喫茶店。
伝統のからくり人形も活躍!

●世界のロイヤルO-CHA体験 (1Fホワイエ)

ロイヤルファミリー、国賓ご用達の
銘茶やお茶請けで、ロイヤルな気分を。



中ホール・大地

グランシップ開館5周年記念事業
新作能「利休」(次ページ参照)

11/3

日本茶インストラクター
インストラクション・コンクール

11/6

第2回 しずおかO-CHAクイズ
高校生選手権大会

11/7

展示ギャラリー

今を生きる二人の家元展

11/3~7

(次ページ参照)

3Fロビー・ホワイエ

静岡茶ワールド

11/3~7

●喫茶楽塾

日本茶インストラクターによるおいしい静岡茶の
淹れ方、飲み方。

自分流もてなしの世界大茶会

11/3~7

さまざまなスタイルのお茶会を展開。



1001会議室

静岡県お茶カルタ選手権大会

11/7

交流ホール、芝生広場ほか

全国お米まつり in しずおか

11/4~7

全国から「おいしいお米」大集合! 選び方、炊き方、お米料理
まで情報満載!

●お米日本一コンテスト

●こだわりの米と食のテント村

●お米Caféほか

ツインメッセ静岡

ワールドO-CHAメッセ 11/3~7

世界のお茶の生産から消費までに関わる商品が大集結。
茶葉、茶器をはじめ、多彩なお茶関連商品を楽しみなが
ら、買い物もできる「世界最大級のお茶の見本市」。

●日本の銘茶・世界の銘茶展 11/3~7

■集中展示「茶の機能性」■集中展示「静岡茶ワールド」
■日本の銘茶 ■世界の銘茶 ■お茶関連商品 ■茶器 等

●産業機械展

11/5~7

静岡市内各所

自分流もてなしの世界大茶会 11/6~7

さまざまなスタイルのお茶会、ティーパーティを静岡市
内各所で展開。

シテ、朝顔の精に観世宗家。 新作能として甦る、茶匠の一説。

新春の『静岡能』や秋の『能楽鑑賞教室』など、より多くの人に能の面白さ、奥深い楽しさを知っていただく、鑑賞機会を設けてきたグランシップが、ついにオリジナルの一曲を立ち上げる。

『世界お茶まつり』の開催にあわせ、天下一の茶匠、千利休をテーマに有名な朝顔の茶会に材を求めた新作能で、グランシップに縁深い観世清和宗家が、シテ（主役）の朝顔の精役とともに、演出の立場から参加のほか、利休役に野村四郎氏、地頭に梅若六郎氏と、その顔ぶれは豪華の一言。

詞章を手がけた深瀬サキ氏は言う。「利休は自然の人であり、前衛の人。創作力を常に更新し、一回限りのことを生涯やり続けた。すなわち利休は芸術家であり、その天才なんです」本演目は、いかなれば、その凛とした一面がよく表れた一説である。公演に先立っては、利休を祖とする裏千家千宗室家元によるお茶湯の儀も行われる。



深瀬サキ



観世清和

グランシップ開館5周年記念事業

新作能「利休」

11/3 (水・祝)

PM6:00開場 PM6:30開演

グランシップ 中ホール・大地

全席指定(税込) SS席10,000円 S席8,000円 A席6,000円

出演／観世清和(観世流26世宗家) 作／深瀬サキ

演出／笠井賢一 芸術監督／土屋恵一郎

お茶湯の儀／裏千家千宗室家元

チケット
発売中

朝顔の花

利休の庭に朝顔の花が見事だと聞いた秀吉が、ぜひ見たいと朝の茶会に出かける。が、行ってみると一輪の朝顔も見あたらない。失望した秀吉が茶室を覗くと、床に一輪の朝顔が生けてあり、その独特の美しさに秀吉は深く感動するのである。利休は前日に朝顔を一輪だけ残し、全て抜き取り、黄金の茶室を見せびらかす秀吉に対して、一輪の花が持つ美しさを示したのだった。



能楽の世界、茶の湯の世界。

新作能「利休」では、観世流と裏千家という、日本の伝統文化を代表する二大家元が顔を揃えることになった。

そこで、観世宗家の所蔵品と、裏千家家元の自作好み物を通して、能楽と茶の湯の世界を紹介しようというのが、本企画である。

三十代初めに家元となった観世清和宗家と、昨年十六代を継承した千宗室家元。ほぼ同年代の二人が率いる二つの世界は、余分を排し、緊張の美を創り出す点から似ているようでもあり、まったく異なる世界でもある。この度の展示品の数々が、その共通点と相違点を如実に物語ってくれるに違いない。

また、新作能「利休」創作にまつわる資料なども展示する。



「翁」写真パネル
©林 義勝



小島二四阿絵賛 李白 宮中行楽詞写 坐忘斎家元筆

今を生きる二人の家元展

11/3 (水・祝) ~ 7日

AM10:00~PM5:00 (最終入場PM4:30まで)

グランシップ 6F展示ギャラリー

協力：財団法人 観世文庫、社団法人 裏千家淡交会

入場
無料

特別インタビュー

元家室宗千斎忘坐 家千裏

裏千家といえば、日本の茶道文化の筆頭である。

その家元という重責を昨年継承。

しかし、当の家元は「若宗匠という着物の上に、家元という着物を重ねただけ」とさりと語る。

さて、今回は、新作能「利休」上演にあわせ、家元自らお茶湯の儀をとり行い、

また、好み道具をはじめとする所蔵品も展覧されることになった。

そこで茶の湯の精神やお道具について、さらには利休居士について、家元にお話をうかがった。

家元という立場で昨年初めて発表された、いわゆる“好み物”。純粹に茶道具として好んだものとは別に、そこには日頃からデザインに興味があるという家元ならではの目線が感じられる逸品も多い。

「和親棚」は、普段は家具でありながら、三つに開くとお茶が点てられますよという、そんな軽い気持ちで造ったものです。和室で育った私から見ると、洋室はつくづく不自由ですね。和室なら卓袱台を置けば食事、退けたら寝転がれる。多目的のホールですよ。グランシップみたいな。(笑)ところが洋風では、リビングならリビングなわけです。そうした居る場所を定められた空間でお茶を愉しもうとしたら、何が必要かと。そう考えてデザインしたのがあの棚なんです。中にいろいろ詰め込めるし、上に電話や花瓶も置ける。なおかつ足元が見える立礼棚はイヤだという方もおら



和親棚

れるかもしれないので、前が見えない仕掛けにと。伝統文化を生かす、継承するというけれど、その時代、その時代に生きている。それが文化なんだと思います」

それは若宗匠時代に好んだものとも

趣が違う。「脂がぬけたなあ」と家元。

「若い頃は、“こうあること”にこだわって、結論を先に持っていたという気がします。今は若宗匠時代以上に全国をまわり、お社中の人達に触れることで、実際どこに苦労されて、どういうものが便利だと思っておられるかがわかるようになってきました。家元だ何だといつても、肩書きを外したら社中の方と同じ、一茶人。お茶会で亭主や半東、お運びの役目があるように、家元という役目を果たしなさい、そういう運命なのだと受けとめています」

今回は、能楽の世界から、観世宗家との揃い踏み。先々代にあたる観世流二十四世は、新春に『翁』を舞うたびに“よくぞ能の家に生まれてきたと思う”と、著書に記していたが……

「よくぞというよりもむしろ、もったいないという気がしているんですね。歴代お一人お一人に比べて、私が一番出来が悪い。家元を継承して二回、二月一日に利休御祖堂で大福茶をいただきましたが、去年はまず何をしたらか覚えていない。今年はずっと覚えていないなあ、申し訳ないなあと思いつながらお努め

しました。また、地区大会などではお社中の方が歓迎をしてくれますが、そのときにも申し訳ないなあ。逆に私が先に入って、“みなさん、ようこそ”と迎えてあげたい気持ちのほうが強いですね」

たまたまこちら側に生まれ落ちただけ、と語る家元だが、その“こちら側”の祖こそ、千利休その人。幼少の頃から、利休御祖堂にて掌を合わせる習慣を欠かさないという家元にとって、利休居士とはいかなる存在なのだろうか。

「確かに利休居士が侘び茶の大半を完成されたとは思いますが、二代目の少庵居士、三代目の宗旦居士、この三代に渡って完成させた大事業だったと私は考えるわけです。だから、利休居士のお像や三人のお位牌がお祀りされた利休御祖堂で、毎朝額すき、感謝申しあげている時間というのは、まさに母に抱かれている感覚、胎内帰帰の時間でしょいか」

御祖堂には、利休居士が腹を召された際の脇差しも置かれているという。そうした秀吉との関わりも含め、千利休には多くの逸話が残るが、新作能「利休」では、最も人口に膾炙されたエピソード「朝顔の茶会」(前ページ参照)を題材にしている。

「朝顔の話は、秀吉という人に茶道というものの、利休居士が考えている茶の姿を見てもらわんがための一つの、

「家元という肩書きを外したら、社中の方と同じ、一茶人。
いいお茶会、一期一会をつくりあげるため、
ただひたすら家元という役目を果たすだけです」

方法だったと思いますが、私は気の毒
で（朝顔を）よう切れません。利休居
士にはもとお茶目な逸話もあるん
ですけれどね。でも、あの朝顔を切っ

た利休さまだから、今日、私がここに
いるんだとも思います。私の好きな能
の言葉に、時分の花、というのがあり
んですよ。三十歳には三十歳のやり

方、四十歳には四十歳の表現の仕方
があるということでしょう。今日ここ
にいる私をきちんと見つめる。それが
大切だと、そう思っているんです」

裏千家 十六代坐忘斎千宗室家元
昭和31年、15代鵬雲斎千宗室家元の長男として
生まれる。同志社大学文学部卒業後、'82年大徳寺
にて受戒得度。'03年元日に裏千家家元を継承。

写真家、 アンリ・カルティエ＝ブレッソン。

「われわれ写真家は、消えて行くものを扱う。そして消え去った時には、
それをもう一度引き戻すことのできる仕掛けなどありはしない。
われわれは、記憶を現像してプリントすることはできないのだ」

アンリ・カルティエ＝ブレッソン「決定的瞬間」前文より



Paris 1952 ©HENRI CARTIER-BRESSON / MAGNUM PHOTOS

享年95才。この夏、フランスの国家的至宝といわれ、まさに写真界の巨匠たるアンリ・カルティエ・ブレッソンが、フランス南部セレストの自宅で死去した。

’66年のインドのルポルタージュ

「街中を一日中ウロウロしていた。いつでも飛びかかれるように緊張しながら、世界(三三)を『捕まえる』と決心していたのだ。——生きていく行為の中にある世界を保存するために」

を最後に第一線から退き、’74年以降はもっぱらカメラを絵筆に持ち替えて、絵画やデッサンに専心の日々を送っていたと伝え聞くが、それでもやはり20世紀写真の、そのど真ん中に君臨してきた人物であることに変わりはない。

裕福な家に生まれたブレッソンは、子どもの頃からカメラに親しみ、画家を志してパリに出て、さらに文学にも心惹かれケンブリッジに遊学するという、実に豊かな青春時代を送っている。

しかし、23歳でアフリカに渡り、コート・ディヴオールで本格的に写真を撮り始めてからは一変、彼の人生は写真二色となる。ヨーロッパ、メキシコ、アメリカを旅してはシャッターを切り続けた日々。当時について彼はこう語っている。

アンリ・カルティエ＝ブレッソン Henri Cartier-Bresson

1908	8月22日、フランス、セヌ・エ・マルヌのシャントルーに生まれる。	1947	ジョージ・ロジャーらとともにマグナム・フォトスを設立。
1927-28	アンドレ・ロートに絵画を学ぶ。	1948-50	東洋で3年間を過ごす。インド・ビルマ、パキスタン、中国を取材。インドネシアでは独立の瞬間を目撃。
1931	コート・ディヴオールで1年を過ごし、ヨーロッパに戻り写真を撮る。	1958-59	中華人民共和国建国10周年の際、3ヶ月中国に滞在。
1932	ニューヨークのジュリアン・レヴィ・ギャラリーで初個展を開く。マドリッドで写真展。最初の写真集を出版。	1960	キューバでルポ、メキシコに3ヶ月間滞在后、カナダへ行く。
1936	ジャン・ルノワール監督の助手をつとめる。	1965	インドに6ヶ月、日本に3ヶ月滞在。
1937	スペインの病院のドキュメンタリー映画「生命の勝利」を制作。	1974	この年以來デッサンに集中。
1940	ドイツ軍の捕虜となり、三度目で脱出に成功する。	1981	フランス国立写真グランプリ受賞。
1943	マティスやボナール、クロード・ラッセルの芸術家のポートレイトを写す。	1986	パレルモにてノヴェチェント賞受賞。
1946	アメリカに戻り、戦死の誤報によりニューヨーク近代美術館が企画していた追悼展を完成させる。	1989	パリ国立写真センターによりHCB賞が創設される。
		1997	120点のオリジナルプリントが何必館・京都現代美術館に収蔵される。
		2003	アンリ・カルティエ＝ブレッソン財団が設立される。
		2004	フランス南部セレストの自宅で死去。



国立自然博物館 1976
© Martine Franck / MAGNUM PHOTOS

「写真は私が望む生き方へ導いてくれた。世界に大きな好奇心を抱いていたその頃、いつ写真を撮ろうかなど考えなかった」

第二次大戦中はドイツ軍の捕虜となり、三度目の挑戦で脱獄に成功。収容所では死刑宣告も受けていたことなどから戦死の誤報が流れ、アメリカのニューヨーク近代美術館で準備されていた追悼展に、世界を放浪中のブレッソン本人が遭遇し、追加出展したというエピソードは有名だ。

’47年には、ロバート・キャパやデヴィッド・シーモア、ジョージ・ロジャーらと、報道機関と写真家の仲介役となる「マグナム・フォト」を創設。それは既存の雑誌・出版社からどんな規制も受けない最初のフォト・エージェンシーであり、ここをベースに彼は再び世界に飛び立つていく。

そして、ガンジーの葬儀、ロシアの解放、インドネシアの独立など、ブレッソンは、写真を通して多くの事変、「決定的瞬間」に立ち会ってきたのである。

グランシップでは、この偉大な写真家に心から哀悼の意を表するとともに、あらためてその写真世界をここに広く紹介するものである。

「それまでにちょうどライカを見つけていた。
それは私の目の延長になって、
見つけた時以来、それから離れたことがない」

ブレッソンの伝説は、往々にして「決定的瞬間」という言葉と共に語られる。「決定的瞬間」とは、彼の処女写真集のアメリカ版タイトル(The Decisive Moment)だが、そもそものフランス語タイトル(Images à la Sauvette)を直訳すると「すり抜ける映像」「逃げ去るイメージ」であり、これについての論争もまた彼の名声を二層高めたことも事実だ。

しかもその写真集の装丁を手がけたのは、かの有名なアンリ・マティスである。さらに別の写真集『ヨーロッパ人』では、ミロが装丁を、サルトルが解説文を書いていることなどからもわかるように、ブレッソンは報道写真家でありながら、キヤパとは明らかに違う空気をまとっていた。

〈何必館^{かひつかん}・京都現代美術館〉館長の梶川芳友氏の言葉を借りるならば、「ブレッソンは、ロバート・キヤパのように戦場の最前線にまでは決して踏み込もうとはしなかった」。そして「ズバ抜けた感性和造形力を持った人」であるという。確かにブレッソンの写真はすべて



Alberto Giacometti 1961



Mexico 1934



St-Lazare Station, Paris 1932

ブレッソンは、1932年にコンパクトな35mmのライカに出会う。以来、彼はライカを自分の肉体同様に操り、街角のルポルタージュを超えた。



Mexico 1934



Valencia, Spain 1933

質問も活発。積極性のある静岡の子どもたち。

中村 浩美(科学ジャーナリスト)
(航空評論家)

毎夏恒例。今年、5回目となる「サイエンススクール」を開催。



開館以来、夏の恒例行事として迎えていただき、今年で5回目。リピーターも多く、ほかの地域と比べても、静岡の子どもたちには積極性を感じますね。リアクションがいいし、質問も活発。おそらくそれは継続して開催してくださる、その一つの成果であるとも思っています。現代の子どもたちを称して「興味の持てない」「無関心な」子どもたちとする向きもあり

ますが、好奇心を持つて積極的に取り組んでみようという子どもたちがいる。これは確かです。けれど、自分が何に興味があるのか見出せない子どもたち、こちらのほうが遥かに多いこともまた事実です。そうした状況から、自らの興味に積極的な子どもたちが特殊存在視されかねない。それが恐いなと思うんです。ですから、それを防ぐための社会環境づくりのつとめ

てグランシップがあり、私たちのスクールが役立つのなら、これほど素晴らしいことはありません。グランシップは文化、芸能はもちろん、幅広いジャンルを手掛けていくそうですが、今後より多くのものを吸収し、その広い視野から最適なものを県民の皆さんに提供していただきたい。そしてそうした翼を我々に担わせていただければ嬉しいなと思っています。

ノー・トリミングでプリントされるのが特徴だ。それこそ瞬間的な構図の証。「いわば芸術の領域におかれても耐えうる画面が作れる」それがブレッソンなのである。さて、グランシップでは、〈何必館・京都現代美術館〉の協力を得て、今秋より3年連続の3回シリーズ『世界写真家シリーズ』が始まる。その初年度を飾るのがブレッソンであり、以降、ロベール・ドアノー、ウィリー・ロニと、ほぼ同世代を生きたフランスの写真家が続く。ドキュメンタリーの神様、ルポルタージュの第一人者といわれるブレッソンが見た、感じた、切り取った「決定的瞬間」。それをこの秋のグランシップでぜひ、共有してほしいと思う。



何必館・京都現代美術館

Kahitsukan・Kyoto Museum of Contemporary Art

館長である梶川氏が自ら設計。地下1階、地上5階建の館内には村上華岳、山口薫、北大路魯山人の作品室が設けられ、5階には茶室と自然光が入る坪庭が配されている。年に約2回特別企画展を開催。

京都市東山区祇園町北側271 TEL075(525)1311 ■開館時間 / AM10:00～PM5:30 ■休館日 / 月曜日、年末年始、企画展準備期間 ■入館料 / 一般1,000円 学生800円

何必館・京都現代美術館所蔵 世界写真家シリーズI

アンリ・カルティエ＝ブレッソン展

10/9sat～24sun

AM10:00～PM6:00(最終入場PM5:30まで)

グランシップ6階 展示ギャラリー

一般500円(当日600円) 中高大生300円(当日400円)

チケット
発売中

※小学生以下と70才以上の方、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方無料

長谷川

権

世界をひらく言葉。

「俳句は短いですが、一つ一つの言葉がとても重要になる。小説などは向こうから訴えかけてくるものですが、

俳句は全力を投入して、そこで使われる言葉の世界に入っていくかないと、世界をひらいてくれない。

一種わがままな形式なわけで、そこが面白いと思うんです」

季語は、宇宙的な言葉。

十七音。そのわずかな言葉を手がかりに一句の回りをのぞき見れば、そこには一つの宇宙が広がっている。果たしてその宇宙に行き着けるかどうか。俳句鑑賞の面白さはその謎解きにあるのかもしれない。その俳人は言う。人間が言葉を持って初めて、この世はいきいきとしたものになった。言葉の持つ深さ、重さ。それをおしえてくれるのもまた言葉。その人の言葉に、日本の、言葉の世界に暮らす幸せを感じた。

——俳句を詠むきっかけ、あるいは俳句は面白いと最初に思われた句というのはありますか。

「子どものころから日本語は面白いな

と書いていて、そのきつかけとなつたのは俳句というよりもむしろ詩や短歌でした。宮沢賢治の詩とか、若山牧水の短歌とか。中学の国語の先生が、熊本ではかなり知られた詩人だったんですけど、その先生が授業で自分の好きな詩や短歌の話をされまして、文芸が面白いなと思ったのはそれが最初です。俳句はもっと大人になってからです。教育の力は偉大ですね。なぜ、俳句なんだろうと後から考えてみると、まず日本語に興味があった。で、その日本語が一番うまく生かされる形式が俳句ではないかと思うたのです。俳句は短いですが、一つ一つの言葉がとても重要になる。一つ一つの言葉の重さがほかの文芸とは違うわけです。だから、一つの言葉が持っている味わいとか意味とかが最大限に発揮されなければ、俳句は成り立たないわけですね。で、味わいや意味が発揮されるためには、読者が自分の全力を投入して読もうとしないといけない。小説は向こうから訴えかけてくるものですが、俳句はこちらから世界に入っていくかなければならない。どういふことかというところ、ここで使われる言葉の世界に入っていくかないと、世界をひらいてくれない。まあ、一種わがままな形式なわけで、そこが面白いなと思うんです。

——数年前まで新聞社にいらして、同時に俳句も詠まれていた。ということは、散文と韻文を両方同時に書かれていたということになりますか。

「基本的には一緒なんです。日本語でできているわけだから。新聞社の仕事は、記

事を書いたり、見出しをついたりという、まさに散文的な仕事ですが、そういう散文の場合は、言葉の意味が通じないといけない。口シクが重要になってくるわけですね。逆に俳句の場合は、そういう世間的な論理はいらない。というよりも、そこから抜け出したい人が創るという感じがします。俳句はたぶん反口シクの形式、論理を超えたところに世界をひらく形式なんだと思います。」

——その手法もまた、まったく違うということでしょうか。

「全然違いますね。たとえば俳句の解説や鑑賞文を書くとき、たとえば芭蕉の古池や蛙飛び込む水の音（文末参照）という句にしても、芭蕉の句の中に置かれた古池という言葉が持っているユアンスを伝えるというのは、至難の技でしょう。そこがもう散文とは違うんです。古池に蛙がとびこんで水の音がした」と散文的に言ってしまうば、それだけのことなんですけれど、この散文の古池と韻文的に使われた古池やの古池とは、全然違うものと考えなくちゃいけないということですね。」

——では、現代詩と、俳句や短歌との違いについてはどうでしょう。

「詩といふものは、現代詩も含めて、もとは音楽なんです。とくに俳句や短歌には五七、七五というリズムがありますし、言葉が持っている音、ア行とか、サ行とか、そういう音もありますから、言葉の音楽であるといえる。そして、俳句・短歌は今も音楽であるわけです。ところが今の現代詩は——これは現代詩そのものの問題だと思いますが——

この百年位、音楽性を排除しようとしてきた。つまり形式を無視して、そこから自由になることが詩であると考えてきた。本来、詩は音楽でありながら、音楽を根絶やしにしようとしてきたことが、今になって現代詩を難しいところへ追い込んでいるという気がします。これからは現代詩でも形式といふものがある。もう一度見直されてくるんじゃないのかな。」



俳句については、これ一冊でかなり多くのことがわかるといわれる俳論集『俳句の宇宙』。最近の著書『04年1月刊』『俳句の生活』では、「切る」「生かす」「捨てる」などのキーワードで、体験や小説などを通して、俳句の世界を多面的に紹介している。

——そして、俳句や短歌ほど季節と深くかわりあう文芸はないように思われますが、「季節は、季節と人間とのかかわりあい」を言葉の上でもっともよく表しているものですよ。それで季節とは何かと考えると、季節は、地球が傾いているから生じる変化なんです。地球が傾きながら太陽の周り

を回転していく、その動きをとらえた言葉が季節です。だから、季節といふのは、もともと非常に宇宙的な言葉なのです。自分がこの世界においてどういう位置にいるかは俳句を創る創らないにかかわらず重要なことなのですが、俳句をつくる人は、季節によって、より深く宇宙と結びつくことができるわけです。」

言葉は、すべての始まり。

——この秋、グランシップで大岡信さんと連句を巻かれるとのことですが、大岡さんのお仕事ぶりについては、どうご覧になっていますか。

「大岡さんのされてきたことは、まさに僕が理想とする一つの形なんです。僕は言葉は、文芸の素材であると同時にすべての始まり、基本だと思っています。人間が言葉をもつ以前は、たとえば木や花という言葉のない、無気味な世界がずっと続いてたわけです。ところが人間が言葉を持つようになって、木を木と名づけ、花を花と名づけることによって、世界がいきいきと見えてきた。いきいきと人間が関わる世界がそこにできた。つまり言葉によって世界が初めてできた。僕は思っているんです。そういう言葉の働きは、俳句だけをやっている俳句のひとしか見えないんだけど、大岡さんの場合は、外国の詩も非常によくわかるし、日本の詩にももちろん詳しい。俳句や短歌も詠める。そういう空間的な広がりを持っているところが一つあります。それから日本の

【はせがわ かい】

俳人。78年東京大学法学部卒業後、読売新聞社に入社。平井照敏、飴山實に俳句を学び、85年句集『古志』を発表。90年には俳論集『俳句の宇宙』で第12回サントリー学芸賞受賞。00年新聞社を退社し、以来、創作活動に専念。02年発表の句集『虚空』で第1回中村草田男賞、第54回読売文学賞受賞。そのほか句集に『天球』『果实』『蓬萊』など。また、随筆集『一度は使ってみたい季節の言葉』『俳句的生活』、編著書『現代俳句の鑑賞101』などがある。現在、『俳句研究』に「古池の彼方へ」、『読売新聞』に「四季」を連載中。俳句雑誌『古志』主宰。朝日俳壇選者。東海大学特任教授(文学部文芸創作学科)。54年熊本県生まれ。

すべての言葉に存在理由がある。だからこそ、詠む側も、受け取る側も注意深くあらねばならないし、そうあってほしい、と氏。「恐ろしいのは、一文字の使い方です。その人の力量がわかってしまうことです。」

古典に対する造詣が抜群に深い。つまり時間的な広がりを持っているということです。大岡さんは、今、言葉を一番広くとらえられる人だと思います。言葉って、普通の人が思っている以上に重要ですよ。ただの言葉に過ぎないというけど、たとえば政治なんか全部言葉でできているわけですよ。政治家にその認識がないから、失言したり、むちゃくちゃなことになる。言葉は、世界の基礎。僕はそう思っています。僕が関わっているのは、文芸の中の、しかも俳句という部分だけなんですけれど、そこだけを見ないで、言葉の持っている、世界とのかかわりや人間にとつての意味とか、そういうところからとらえていきたいなと思っています。それをすでにやられている人が、大岡さんなんです。——これまでも大岡さんと連句を一緒にされているそうですね。

「去年、三島で『三つ物』を十幾つやりました。三つ物というのは、連句の発句と脇と第三という、最初の三つの句のことで、連句ではこれは特別なんです。昔は百句巻いたら、全部お宮に奉納しないで、代表してこの三つだけを奉納したりしたというくらい、その三つが大事なんですね。そのときはすべて僕の俳句を発句にして、大岡さんが脇、第三を僕という形でしたが、今回、半分は大岡さんが発句を詠みましようといわれている。だから、去年とはまた違った世界が広がると思いますよ。」

——大岡さんは、以前、連詩の楽しみというのは、ふだんの付き合いの中ではわからない一面を見ることができるとかもいけない

とあつていましたが。

「連句も同じですよ。この人はこういう人だなという、いつてみれば先入観のようなものがありますね。ところが必ず心の中から出てくるのが言葉ですから、その人のこちらが知らなかった側面というものが表れることがあります。去年の三島の会で、僕の発句が夕暮の道のゆきつく炬燵かなという句だったんですけれど、大岡さんが脇でおでんに残る蒟蒻ひとつと詠んだんですね。つまり炬燵の上におでんが二つ残っている。で、僕が第三で、しあはせかふしあわせかと問はれぬとつけた。それでこのつけあいについてステージ上で話をしたときに、僕は幸せか不幸せかを尋ねているのは男であると。言ったら、大岡さんは尋ねているのは女の方で、尋ねられた男はタジタジとなっているという構図だと言われるんですね。最初はええと驚いたけれど、ああ、なるほどと思った。僕が詠んだ男女は夫婦じゃないんですよ。夫婦だとすると、夫が妻にそんなことを尋ねるなんてありえないですから。もつと違う関係を設定したんです。初恋の人なんかたまたま出会うと、おでんを食べている。そういうところで、今のあなたは幸せなのかと尋ねている。誘いをかけているわけですよ。そういう世界を詠んだんですけれど、大岡さんの想定はたぶん家庭の中で、奥さんが「あなた、幸せなの？」と尋ねているところじゃないかなあ。そういう世界観の違い、その発見も楽しい。今回もまた新しい大岡さんを見ることができた面白いなと思います。」

古池や蛙飛び込む水の音 ——芭蕉のこの句は昔から「古池に蛙が飛び込む水の音が聞こえる」と解釈されてきました。しかし、もしそうならば、「古池や」としなくても「古池に」で十分です。それにわざわざ「水の音」といわなくても「古池に蛙飛び込む音」でわかる。「古池」といってさらに「水」を出してところがくどい。言葉を惜しんだ芭蕉とも思えません。この句は「蛙飛び込む水に音」という現実の現象と、その音を聞いて芭蕉の心の中に浮かび上がった古池のおもかげの交響を詠んでいるのです。
——長谷川権氏主宰の俳誌「古志」オフィシャルサイト
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~koshin/con.htm>より。
「古池に蛙は飛びこんだか」抜粋 ——

11/27(土) 入場無料(要事前申込)

「しずおか連詩の会」 記念講演会

PM1:00開場 PM1:30開演
会議ホール・風

■応募方法 / 往復ハガキに代表者の住所、氏名、年齢、電話番号、人数を明記の上、下記あて郵送を。(返信用ハガキにも代表者の住所、氏名を記入のこと)11月5日必着。応募多数の場合は抽選。あて先: 〒422-8005 静岡市池田79-4 グランシップ「しずおか連詩の会」係



撮影協力: 浜離宮恩賜庭園